Contents

「いま、なにができるか。」

「いま、わたしがおもうこと。」

日本演出者協会会誌「Ｄ」（ディー）第６号　定価＝無料　2011 年 5 月 1 日発行　平成 20 年 11 月創刊（毎年 2 回発行）

【発行人】和田喜夫（理事長）【編集人】篠崎光正（広報部長）【編集委員】篠本賢一・三谷麻里子・小川功治朗・大杉 良・今井夢視・秋葉舞滝子・緑川憲仁
【発行所】日本演出者協会 東京都新宿区西新宿6丁目12番30号芸能花伝舎3F（〒160-0023）電話03-5909-3074【編集・制作】日本演出者協会広報部協会誌「D」編集委員会
【題字】千田是也「Marionetto」より 【印刷所】有限会社一光堂印刷 【表紙デザイン】前嶋のの 【本文デザイン】奥秋 圭

東日本大震災 2011.3.11

謹んで震災のお見舞いを申し上げます。

このたびの一連の大災害に際しまして、亡くなられた多数の方々のご冥福を祈念し、
謹んでお悔やみ申しあげます。
被災された皆様に心よりお見舞い申しあげます。

日本演出者協会は、このような状況下で、演出者として、演劇人として、
何を考えどのように動くのかを模索するため、協会員からの声を集めることにしました。
しかし、事態はいまだに不透明であり、ここに掲載した発言は、
震災から１カ月あまり経った４月中旬での発言である事をご了承願います。

投稿者

① 佐藤克夫
② 伊藤み弥
③ 貝山武久
④ 中村嗕夫
⑤ 瓜生正美
⑥ 木村繁
⑦ 大島信久
⑧ 由布木一平
⑨ 河東けい
⑩ 笛田宇一郎
⑪ 松本祐子
⑪ 西田了
⑫ うちやまきよつぐ
⑬ 坂手洋二
⑭ 三浦直喜
⑮ 槇岡眞弓
⑯ 堀益和枝
⑰ 小林七緒
⑱ 井上ほーりん
⑲ 岡安伸治
⑳ 松本晴美
㉑ 岡西健雄
㉒ 布宮和明
㉓ 小松越雄
㉔ 青井陽治
㉕ 流山児祥
㉖ 篠崎光正
㉗ 篠本賢一
㉘ 今井夢視

許せない〝想定外〟

佐藤克夫（劇団仙台　さとう要）

延期した、4月29日の仙台市「戦災復興記念館ホール」で予定していた、劇団仙台の『零度10！』――地域主権改革!?――公演の主役は、石巻市の自宅を、津波でぜんぶ流された。オオ、〝想定外！〟

河北新報のトップに、「被災者向け住宅あっせん、県と不動産団体協定、機能せず、〝規模想定外〟」と出た。ナルホド、これは〝想定外〟だ。なにしろ、福島県からの避難所にもなっているのだから。7月12、13日の同ホールでの演劇『仙台空襲――孫たちへの伝言パートIII――』公演も、中止になりそうである。これも、〝想定外〟。

シカシ、〈東京電力とその同調・利権者の軍団〉の数々の言葉と所業。さらに、4月5日には、突然、『汚染水』海に放出！

これら一連の〝想定外〟は、断じて、許せない。

いま、わたしがおもうこと

伊藤み弥（仙台市在住）

気がつけば、仙台は桜が満開だった。私の体内時計はまだ3月なので奇妙な感じがする。感覚と現実との狭間で「宙ぶらりん」――これが今の私の気分である。

私の居住は仙台市の中心部に程近く被害は軽かった。震災から数週間、日常の義務を免除された日々を街の人びとは楽しんでいるように見えた。繰り返される悲惨な報道に辟易し、「なんかヒマだよねー」と会話する若者を見て、このタイミングで小さい作品を上演してもいいかなとさえ私は思った。その後、私は故郷の名取市閖上を訪れた。町は津波で文字通り消滅していた。1か月を過ぎても未だ遺体捜索活動が続き、道路には見物の車が列をなしていた。私は黙するだけだった。涙すら出なかった。

「こんな時にこそ物語が必要」「アートは人を癒す」とは重々承知、しかしいざ「こんな時」になってみた結果は「よくわからない」だった。中途半端な被災者たる私は、希望と虚無の狭間で今日も宙ぶらりんのままだ。

いま、わたしがおもうこと

貝山武久（メープルシアター）

災害の翌日、かろうじて繋がった電話で、弟の行方不明を知った。胸騒ぎは的中して四日後、弟は家族の許に無言の帰宅をした。仙台空港にほど近い海辺の町にある資材置き場が弟の仕事場で、そこで現場監督をやっていたのだ。三週間順番待ちして火葬。しかし今度のような災害で、未だに一万数千名を数える行

方不明が出ている現実を思えば、弟のように遺体がみつかり葬られた者はまだ幸せだ。

大災害をもたらした自然の前に、人間の存在が如何にちっぽけか、まざまざと思いしらされる思いだ。ましてや重ねた起きた原発事故の悲惨を見れば、人間のさかしらさと、思い上がりとをいやでもつきつけられる。思えば我が演劇のルーツである芸能も、自然に対する畏敬の祈りから生まれてきたものだ。ここらでもう一度原点に戻り、傲慢を捨て、謙虚に生きることに感謝したところから再生すべし、という天の啓示を受け止めるべきなのか。

いま、わたしがおもうこと

中村哮夫

連日、天災に次ぐ人災のＴＶ報道を見ていて不思議に思うことが一つある。

それは原子力発電を推進し、実地し、安全だ安全だと公言していた当時の首相、与党幹部、及び電力会社の最高責任者の、その時々の発言の映像は、ＮＨＫ及び民法各社のアーカイブに当然存在するはずである。それが一切出てこないのは何故か。それはある方面から圧力がかかり、その種の映像を絶対放映させないような管理体制が敷かれているからにちがいない。此処にある放送局に勤務する一青年がいるとする。彼は、それらを盗み出しインターネットに流してしまう。それは全国に、いや全世界に瞬時に流れて……。と、いうような空想のシナリオを思い描く。大変子供っぽいけれど、それを見たいと思う。私と同じようにそういう映像を見たい人は世に多くいる筈です。未来を考えるためにも過去を隠蔽してはならない。

いま、なにができるか

瓜生正美（青年劇場）

今から三十年前、青年劇場は、ふじたあさや作・千田是也演出の『臨界幻想』を上演し、原発所在地、予定地予定返上地など全国二十四ヶ所巡演を行いました。「原発」が内包する「必然」ともいえる原発事故、そして事故隠しのあげく「炉心融解」という周辺の人たちを巻き込む大事故を引き起こすという予見的な「近未来劇」でした。「原発」で働き心臓マヒで死亡した息子の死因に疑問を抱く母親の、素朴な行為をタテ線にした「母もの」としての「切り口」が観客の胸を打つという、知と情を兼ね備えた、すぐれたドラマツルギーでした。現在、劇団では今回の「原発事故」の「人災」としての本質を劇団員全員で確認し、二度とこういう悲劇を起こさないよう「声をあげつづける」為に、国内向けの『臨界幻想』のドラマ・リーディングに取り組んでいます。発表が4月30日、12：00からの一回だけというのが残念ですが――。

いま、わたしがおもうこと

木村繁

柏崎で泳いでいたら青黄緑の熱帯魚の群れにかこまれて南国リゾートにいるようだった。敦賀の海にも福島の海にも熱帯魚はいるらしい。東京、名古屋、大阪にも海はあるのに都市の２００キロ圏内に原発はない。熱帯魚の海はない。発電所には広い土地がいるから都市には造れないそうだ。埋め立てても空港は造るのになあ？けっか都市は生産と消費と芸術の花を咲かせた。私だって演劇は都市にあると神話を語ってきたような気がする。「地方に演劇を！」と叫びながら私たちの両足は演劇をするために都市を目指した。気づかなくてはと思う、演劇は都市と２００キロ離れた地とほんとうに手をつなげるのか。この夏は東北の地にいってみる。

自分再建にむけて！

大島信久

謹んで東日本大震災のお見舞いを申し上げます。3月11日。原宿を出て直ぐ、大きな揺れがあって電車が止まった。電気が消え、1時間後に、扉が開いた。駅員に誘導され代々木駅まで線路の上を歩いた。救出されたのだ。私は浅間山を、見て育った。小地震は日常的でおまけに中小学校裏の茶臼山は、一年中地滑りを起こし、慣れっこだった筈だが……。大震災の影響で、劇団吹き溜まり5月本公演は中止。養成所の公演は、延期にした。私は、演劇を始めた当初は、かなり実験的な事もしていた。ある時、それを見た。早稲田大学の学生から、「学祭でやってほしい」と声が掛かり、参加したこともある。……今、あの、新鮮な、力強い響きが聞こえてくる。惰性になりノルマをこなしている。自分を見つめ直す。最後のチャンスを与えられたような気がする。私の脳に、かなり激しい揺れを感じた。

私の三月

由布木一平

生涯忘れる事のない光景が三月に至る。一九四五年三月、日時は定かではないが、王子（現北区）への空爆である。シュルルと音量が次第に高く近づく爆弾の投下音、ザーっという高い雨音のような焼夷弾の落下音、接地した瞬間、街の光景は一瞬のうちに、美しい静止画に変わり「コマ」が移るとあっという間に炎に包まれる。壮大な花火のような美し

さだった。死への恐怖なぞ全くなかった。こころが動かず、人間の死にさせも無感動な十二歳。それに先立つ三月十日、東京大空襲である。自宅からも眺められた光景は想像を絶する。燃え上がる音さえも聞こえそうな巨大な炎の柱が燃え尽きる事がないかのように空を舞った―その天空の絵を美しいと視、その地上での地獄絵を全く想像できなかった感性――一夜のうちに十万人が殺されたというのに――この経験が長いこと私を苦しめることになった。二〇一一年三月十一日の光景も、言葉を失うものだった。が、今亡くなられた多くの方々への哀悼と共に、生きるという人間の根源的な営みを見据え、耐え、災害に打ち克とうとしている被災者に私は懸命に学ぼうとしている。

わたしに、今、できること

河東けい

三月十一日以来、TVの被災地情報にくぎ付けになってしまった毎日、私に何が出来たろう……ただ、生きていてくれて嬉しかった。抱きしめてあげたかった、一人一人を。そして、阪神・淡路大震災の時に、神戸、阪神以外の人形劇団やピッコロシアター、その他の若者が被災地のあちこちで演じ、どんなに人々を和ませてくれたか、被災地の私は演劇人として嬉しかった、誇らしかった。しかし今回は、広範囲の上に、地震、津波、原発被害と長期に渡る苦難をしいられるだろう。劇団では若いひとたちが、青空マーケットを開催して義捐金に、六月には〝宮澤賢治の在夢〟を河東が構成・演出でチャリティー公演の予定。狭い日本、苦難を抱え、これからもどうなるか――「絵本プロジェクト」などの良い企画に、出来る限り協力したいと思う。

いま、わたしがおもうこと

笛田宇一郎

東日本大震災という未曾有の大災害が起った。被災を免れた側の人間が、いま自分に何ができるかと、個々人として自らに問うことは当然だとしても、いま演劇に何ができるかなどと、われわれ演劇人は問うべきではない。善意も悪意も意志も遠く及ばぬところで、人間は常に〈運命〉という試練に立たされているからこそ、「ヨブ記」や「オイディプス王」などに見られるように、人間は宗教や悲劇という形式を必要としているのだということに、改めて想いを馳せるべきである。「オイディプス王」は、飢饉や疫病によって滅びつつある町を救ってくれと、テーバイの人々がオイディプスに嘆願するところから始まる。いかなる状況下であれ、個々人としてではなく演劇人としてできることは、例えば、「オイディプス王」のこの冒頭の場面を観た人が、そこに被災者の直訴する声／身体を目撃できる上演を目指して、いかなる努力も修練も惜しまないことだけである。

いま、なにができるか

松本祐子

被災した人たちのことを思う時、胸を張って「いま私は、これこれの事が出来ます」と言うことを躊躇してしまう。私たち演劇人が被災地に出向いていって公演やワークショップなどを行うことで、少しでも幸せな気持ちになっていただけるのなら、「出来る範囲で」というかぎかっこは付いてしまうが、いくらでも出向いていきたい。でも被災地の状況によっては、基本的な生活を助けるボランティアが来てくれた方が何倍も有意義で、私たちが出向いていって普通の生活の喜びを提供できると考えること自体がこちらの自己満足なのではないだろうかという疑念がよぎる。今、被災地が何を求めているのかをなるべく正確に知ることがまずは第一歩だろう。その上で、「演出者協会が中心になって移動演劇隊を作る」「被災地の演劇活動を助けるための募金活動をする」「今回の原発という人災について、意見を発信する」など、行動していく。せめて、出来ることをひとつづつ……。

いま、わたしがおもうこと

西田　了

あの瞳の輝きをとりもどそう！

東日本大震災は、人々を恐慌させた。テレビの画面は、災害からの避難で苦渋に満ちた被害者の痛みを刻々と伝えた。映し出された映像の中に、集団避難の移動で、バスへと乗る不安げな学童たちの姿があった。その光景を見て、演劇教室で東北を巡演した際、瞳を輝かせて私たちの芝居を観てくれたあの時の子供たちに思え、せつなさにかられた。……太平洋戦争時、学童だった私たちは、戦災を避けて集団疎開をした。疎開先の人々は、はじめ私たちを温かく迎えてくれたが、月日の経つごとにやっかい者扱いをするようになった。……今度の震災で避難した学童たちに、かつて私たちが体験した苦味を感じさせたくない。そんな思いが、つい、せつなさをこみあげさせたのだ。

「待っていてくれたまえ。演劇教室で見せてくれた君たちの瞳の輝きを、きっととりもどす芝居を、かならず届けるから！」

演劇の力

うちやまきよつぐ

震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、愛する人々を失った方々に衷心よりお悔やみを申し上げます。また避難生活を送られている方々に心よりお見舞い申し上げます。

さて、私にはまだこの巨大な状況をうまく飲み込むことが出来ていません。刻々と変化する状況の中で、自身の思いがうまく定まらないのです。が、この状況の中で、「演劇に出来ることは何だろう?」。そのことを思わない日はありません。「演劇」には人を元気にする力がある。私はそう信じています。その「演劇の力」でいつの日か誰かの力になれれば。そう思っています。

いま、なにができるか。というより、いま、すべきこと。グランドデザイン案

坂手洋二

演出者協会は全国規模の公共度の高い非営利職能団体として、協会員を中心としたネットワークによって、被災地の舞台芸術家、被災地の人々と取り巻く環境を健全化するための支援をする。まずはメーリングリスト等のコストが低く容易に共有可能な情報網をつくって情報を共有する。被災の度合いによる格差が生じないように気を配る（深刻な被災地と比較的被災の少ないところの差は著しいようです。加えて、支援やケアにも厳しい格差があります。指定避難所と、そうでないところのズレが激しいようです）。エリアごとに、まずは臨時でいいから、ステーションを設ける（盛岡・弘前・仙台・青森といった都市が中心になりがちですが、協会の内部的には、暫定的にはキーパーソンがいる所を拠点にせざるを得ません。しかし今回は非常時ですから、積極的な協会員だけが報われるという形が固定化していくことは避けたい。将来的には別な団体の協力も得て、地域によるズレを極力なくしていけるよう策を練るべきです）。海外の演劇人の応援を受け入れられるように国際窓口を設ける。「被災地の舞台芸術家を支援する事業」と、「被災地の舞台芸術家たちとともに、被災地の人々と取り巻く環境を支援する事業」とに分け、合理化し、両者の方向性が抵触する場合の矛盾を解消する。前者については、東北地方でのドメスティックな事業と、東北の演劇人の全国展開の補助とに、これも区分けする。後者については、演劇そのものによる方法（鑑賞・慰問等）と、演劇人の持っているスキルを活かして、広がりのある社会活動（児童・高齢者への支援、ワークショップ等）をする部門、これも区分けする。それ以外の、必ずしもアートに限定しない緊急避難的なボランティア活動についても情報のパイプを持つ。他の公共度の高い協会や組織、各地の民間団体と共に早急に民間主導による公共組織（NPO、NPO等）を作り、国・自治体との交渉の窓口にすると共に、そこを公共助成の受け皿とする。たんに公共事業に協力したり雇われたりするのでなく、公共から正当かつ十分な支援を受け、それを十全に活用する。

事業遂行の過程で、被災状況が改善されたら終了する事業と、これまでの日本にはなかったが本来コミュニティや芸術団体が行っているべきと思われる事業とに分け、最終的に後者を全国組織として被災対応終息後も継続して展開することができるようにする。そのために早い段階で有給の職員を用意し、独立性・継続性を担保する。そうした組織移行については、先延ばしにしないで、むしろ現在の緊急支援の態勢自体を二年程度に期限を区切る潔さを持ち、他の演劇団体とも連携して、民間発信型のアーツカウンシルともいうべき公共組織への移行を明確な目的として共有する。客観性・公正性を持ちつつ、未来に向けた「自由」を守り、表現者が主体的に行う事業であることに、自他共に敬意を払えるだけの環境と水準を要求し獲得する。

※備考

「被災地の舞台芸術家を支援する事業」の実行委員会は、特に勇ましい抽象的な名前は要らないと思います。むしろ一目で機能がわかる組織名に徹するべきと思います。受け取る被災地側との温度差を避けたいです。協会員のためなのか、東北の演劇人全体のためなのか、局面によって優先順位を変えるべきで、片方に偏らないように柔軟性を持つべきです。

私はこんな支援活動をしたい

三浦直喜

あまりにも悲惨な映像を目にして暫くは放心状態、数日後やっと「私には何が出来るか」を考え、自分のHPで支援の意思を示した。まずは義援金、次の行動は熊本市民会館の運営員会にて東北文化支援の形を提案した、これは微々たるもの。6月に浅草で、その後に茨木県栗原市へ支援のパフォーマンスに行く。しかし訪問先の栗原寺が余震で被災してしまった。酷い原発の問題もありその推進に難関はあるが、この行動は演劇人としての使命だと思っている。私は以前より「役に立つミュージカル」をコンセプトに演劇活動を推進している、そして今年は「芸能農五輪の書」と「地球芸術運送」だ。この構想は農業文化（アグリカルチャー）支援活動に必ず生かせる。「風評被害に遭う農業」、そして「自粛する東北の文化活動」。この問題を解決する為に活動したい。演劇の祖、

世阿弥は都会と農村を中心に公演活動したと言う。現代の演劇人もまた、未来の危機に備える為に是非、農と融合を。何卒ご一緒に！

いま、わたしがおもうこと

槇岡眞弓

友人（八十三歳）曰く、「国難」という言葉に耳を疑った、と。テレビから流れてくる「日本は強い国、皆で考えれば乗り越えられる。」一日中何十回となく耳にする同じ言葉。【我慢】【自粛】果ては、夏の海水浴も自粛せよ！

え？戦時中ですが!? 友人は鳥肌の立つ思いでこれらの言葉を聞いたと言う。何か目に見えぬものにジワジワとしめられているようだと。戦後生まれの私だが、同じように思った。AC広告にイライラしながら状況を知りたくて、テレビはつけっぱなし、一方で節電を呼び掛けて……？ 元気を送る側が気力を失くしていく！ いけないよね！ そんな時「絵本プロジェクト」のお知らせ。今、友人、知人から届く絵本を送る。少し役に立ててる、よかった。大事が生じた時、国はまず「教養・文化」に白羽の矢を立てる、節電による会場不使用めげる事なく表現の場を確保しましょう！

まずは一市民として存在したい

堀益和枝

大震災により原発事故が起きて、自分が市民として如何に存在してこなかったかを痛感している。チェルノブイリ事故の時私は子供だったが、原子力発電について詳しく学習した。そして原発を止めるべきだと考えたのだが、成人して何もしてこなかった。だから私は結果として原子力推進の一助になってしまった。せっかく公民権を持ちながら、政治に距離を置いてきた自分が情けなくて仕方ない。今、一市民として気骨ある存在でいようと模索している。それが出来ないなら、社会的な舞台を上演しても単に社会問題をネタとして扱っているだけになると思うのだ。私が市民として存在できたら、それこそ舞台は政治的であれ心情的であれ、娯楽的でも享楽的でも、心血注いで上演できよう。日常の行為として、生活費を稼ぐのと同じくらい当然の行為として、市民として存在したい。

いま、できること

小林七緒

惑わされずに、揺らがずに、芝居を作り、演り続けること。

大震災と原発事故で被害を被った方々の痛みをおもいながらも、立ち止まらずにやり続けること。

幸運にも無事であった者のできること。

被害にあわれた方々が、ふと息をつこうとした時に、演劇が無くなっていたなんてことにならないように。

見えない恐怖～被災体験から～

井上ほーりん

東日本大震災に被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。母とも友とも敬い親しんだ自然がもたらした災害の惨さと、今この時にも余震という天災および放射能という目に見えない恐怖と闘われている人たちのことを思うと、言葉も見当たりません。

私は新潟県小千谷市在住で、平成16年の中越大震災時に自宅が半壊、道路もライフラインも寸断された陸の孤島で約1ヶ月の避難所生活を余儀なくされ、長期間おさまらない余震に家族がバラバラとなった状態で約半年を過ごしました。さらに平成19年の中越沖地震では、黒煙吹き昇る柏崎刈羽原発から半径30km圏内の自宅で、殆ど情報が伝わって来なかった為に目視できない恐怖を体感しました。原発列島に居住している私達は麻痺していました。福島原発事故により避難しておられる方々の姿を見るにつけ、あの時の恐怖と苛立ちが生々しく蘇ります。

二度の被災中、被災地からのメッセージを送ろうと公演を企画、「俺達（被災生活者）もここにいるのだ！」という自己存在確認と、支援に対する感謝の思いは伝えられたように思います。現在の活動もここが原点になっています。

震災は誰にでも起こり得ることであり、表現の題材とされることもあります。それはその瞬間の恐怖と艱難辛苦を体感した人こそが後世に伝えられることであり、今現在は困難とは思いますが、そのような時が一刻も早く戻ってほしいと祈っています。

コウナゴ

岡安伸治

地震で揺さぶられ、地割れ、ねじれ、倒れ。津波にのみこまれ。船は高速道路の橋げたにぶつけられ。原子力発電所の建物は水素で吹き飛ばされ。レベル7。家族は離ればなれ。何代も続いた家と土地からは引き離され、いつ帰れるのかも分からず。人の姿の消えた地で、やせた犬や牛がさまよう。避難所の移送先を転々とする高齢者は雪降る寒さにひたすら耐える。

コウナゴ（小女子）の思いを誰が知る。

いま、わたしがおもうこと

松本（知久）晴美

この度の大震災にて被災された多くの方々に心からお見舞いを申し上げます。

あの震災後、多くの方々同様、自分の生きる意味と活動について大変悩みました。関わる方々に、舞台を通して生きるエネルギーや輝く命を伝えて参りました。しかしこのように本当に生きるか死ぬかの状態にありながら、歌って踊って輝く命なんて本当に意味があるのだろうか？　とても悩みました。

震災数日後に行った講演会〈未来ある子供達の為に〉でも心と言葉の矛盾に悩みました。しかし今だからこそ生きている命に感謝し、最大限に生かす事が意味のある事と受け止めています。いつまでも悲しんでいたら報われません。社会の循環も悪くなり更に落ちてゆきます。それよりむしろ、多くの舞台を行い社会にエネルギーと交流を伝えてゆく事で、また新たな素晴らしい日本文化を築いてゆけると信じています。今こそ立ちあがれ日本。

いま、わたしがおもうこと

岡西健雄（京都府福知山市）

東日本東北大震災に被災された方々に、心よりお見舞い申しあげます。

今すぐに被災地にいけない自分に腹立つ思いと、遠い関西からでも何か役にたちたいと、思います。それぞれの人が、その人の得意な事で役に立てればと思います。演劇に関わるものとして演劇が喜ばれるときがきっとくると、信じています。1日も早い復興を願っています。カンバレ東北。

いま、わたしにできること

布宮和明

私は、理事長を務めております、ＮＰＯ法人 Inseki Project で、各団体及び関係者と連携を強め、『災害支援プロジェクト』として鍼灸師によるボランティア活動のサポートをしています。

これは、長い避難所生活の中での疲労の蓄積が心配される被災者の方々、昼夜を問わず、被災者の支援に当たっている方々に、少しでも疲弊を和らげて頂けるよう、鍼灸マッサージ治療ボランティアによる支援をしていこうという活動です。私達は、この活動の情報発信の場であるホームページの作成や、情報収集・提供、ボランティア募集、活動に当たっての義援金募集などの後方支援をし、少しでも、東日本大震災で被災された皆様、支援者の皆様のお力添えをしたいと活動中です。

いま、わたしが想う事

小松越雄

昔演出家の中村敦夫氏に「演劇とは政治劇だ。誰でもやれ。」という言葉を教えてもらった時がある。この言葉を今こそ大事にすべきだと私は想う。責任を全く取らないリーダー達。自分さえよければいいという我儘にとりつかれる日本人の一部の人々。また時の権力に媚を売るマスメディアの人々。全てどこかおかしい。このおかしな世相に、今こそ演劇という場で何かを言うべきである。そして、また、何か起きてから大騒ぎをするのが日本人の悪いくせである。「備えあれば憂いなし」という言葉が守られなかったが故に今回の大地震起きたと言っても過言ではあるまい。最後に「言いたいことのない奴は舞台をおりろ」というサンフランシスコの前衛演劇人の言葉を是非記しておこう。行動のみが真実である。皆行動しよう。今こそ行動の時だ。

覚悟

青井陽治

思い出す言葉が二つ。

「ニューヨークは、劇場と野球場から復活する」。September 11th の時、ニューヨーク市長。「あそこに土台だけ残ってるでしょ。去年の嵐で波にさらわれて、みんなこっちに新しい家を建てたんですよ」。ハワイの日系人。

演劇はこういう時、即効性のあるものではない。命に関わる、存在に関わる現場に、演劇は邪魔だろう。

復興に貢献したいなら、演劇が自立するのが一番。

「向う10年、助成金は頂きません」

そう言えるか。これは、日本が文化国家であって欲しいと願うのとは別の話。

それで生き延びられる演劇なら、やがて「被災」の全貌が見え、想定外の絶望や怒りや恐怖や混乱に日本が陥る時、励ましや安らぎ、もしかしたら知恵を、提供できるかも知れない。

きちんと朗らかに生活し、甘えず誇り高く、自分の演劇を続けるしかない。僕は、そう覚悟する。

いま、わたしがおもうこと

流山児祥（流山児★事務所芸術監督）

3・11大震災は私たちが真の河原者（持たざる者）であるか、その「生きざま」を問うている。「第2の戦後」と呼ぶべき時代に立っているのだ。戦後65年たった現在、「共有するもの」がなくなった時代に震災と原発事故と

いうクライシスを「同時代体験」している現実。情報帝国主義のもと、格差社会が進み、バラバラにされ、政権交代しても更なる格差社会創出のもと、既得権益へと成り上がり、産・学・官の原子力産業同様の『劇場法』の時代。持たざる者の演劇のチカラが試されている。「身の丈に合った」小さいがお互いに助け合う「ささやかな旅する演劇」を基本に据えて、「脱原発」も組み込んだ長ーい戦いを「楽しく」続けていきましょう。私たちはどこへでも行きます。5月末、岩手・宮城で会いましょう。

いま、わたしがおもうこと

篠崎光正

あの日、稽古中で役者が集まらず連絡もつかない中で、揃うまで稽古をした。しかし全員揃う事はなかった。そんな自分とは比較にならない被災地の状況。被災された方の心情をほんのわずかでも理解したいが、それは永遠にかなわぬ事。わたしにできる事は、被災された方にその心情をあらわしてもらう場をつくる。昨日やっとその企画が現実となった。

被災された演劇人は、被災された方々のこころを代弁し生きるエネルギィに換えてほしい。昨日、被災地から助け出された犬を引き取ってくれないかと近所の人から言われ妻が見に行った。一緒に連れて行ったうちの犬と気が合いそうにない。こんな小さなこと一つにも現実が迫って来て、恥ずかしながら決断が鈍る。ところが、テレビで被災者のがんばりを観るだけで勇気づけられる自分がいる。

いま、わたしがおもうこと

篠本賢一

あるバレエ団の旅公演で『ジゼル』に出演したことがある。もう今から20年ほど前の話だ。私は、大公の狩の従者という小さな役だったが、バレエを始めたばかりの者にとっては、その旅公演は待遇的には恵まれたものだった。8月中に一週間ばかりの日程だったが、その公演会場は、富山県砺波市、福井県敦賀市などだった。文化庁主催・青少年芸術劇場と銘打たれ、地元主催者は、各地域の県ならびに市の教育委員会である。これらの地域はいずれも原子力発電所のある場所で、原発を地元に誘致したご褒美の芸術鑑賞だったわけだ。それらの公演が原発のある地域で行われていたことは、当時からわかっていたのだが、その事実に対して一種の思考停止状態だったことは、とても恥ずべき事だ。「HUKUSHIMA」は歴史に残る地名になってしまった。演劇人としてできること……何がおきているのかを感受すること、そして、行動することだ。

平和産業

今井夢視

25歳の僕にとっては今回の東北関東大震災は社会に通じての、初めての事件。小学四年生の時に阪神大震災、疎開の転校生が来たのを覚えてる。彼は笑っていたし。小学六年生はオウムサリン事件、先生が教室に飛び込んで入り、テレビを付け、麻原が捕まったのを騒いでいた記憶がある。どれもこれもが幼い自分にとっては、なんの現実味もないテレビの話で。なんの、なんの感慨もなかった。25になった僕にとっての今回の大震災は、怖かった。大人になって、何かを知って。何もできない自分に。ただ、呆然とする自分に友が言い放った。「チャリティーをしよう。とにかく演劇を。演劇なんていう平和産業をやっている俺らが、演劇やらないっていうことは、平和じゃないんだなんて言っているもんだ。」僕は演劇を観せたい。爆撃の音がする劇場ではないけれど、安全な処にいる僕ではあるけれど。演劇を観せよう。平和産業の僕ら。人を平和にする権利を持つ。唯一持つ。

NEW ホームページ映像対談 Vol. 1

「震災と演劇」http://jda.jp

対談　日本演出者協会 和田喜夫×日本劇団協議会 西川信廣

日本演出者協会ホームページは、リアルタイム広報として常に新しい情報を発信する第一弾として、
日々流動的に事態が変化する被災地の支援について話し合います。(http://jda.jp　日本演出者協会 HP へお出で下さい)